



さいたま ぶらり通信



さいたま市図書館報

2015年3月15日発行

Contents

わがまちSai発見.....1,2

現代短歌新人賞受賞作が決まりました ほか.....

本棚ぶらり 大人も楽しめる絵本の世界.....3

4

わがまち
Sai 発見

はっけん



荒川を歩く

～びん沼川にまつわる四方山話～

その名のとおり、荒川は過去幾度となく荒れ流域に被害を与えてきました。平安時代に編纂された「日本三大実録」に武蔵国水勞という記述があるのをはじめ、その後の様々な史料にも氾濫の記述が見られます。一方、農業・発電・水道用水として人々に多くの恩恵も与えてきました。現在の荒川の流路は、江戸時代初期に行われた河川の付け替え事業（利根川の東遷、荒川の西遷）と明治から昭和初期の荒川放水路の建設という二大事業によって形作られたものです。今回は、そうした荒川の歴史を西区にたどってみましょう。

明治43年の大水害と斎藤治水翁

明治43年（1910）、荒川流域は大規模な水害に見舞われ、大きな被害が出ました。このとき荒川の治水事業の必要性を痛感したのが斎藤祐美（さいとうゆうび）（1866～1943）です。祐美は、現在の西区飯田新田に生まれ、明治32年（1899）に埼玉県議会議員に初当選して以来40年余にわたり県政に尽くした人物です。祐美の尽力により、蛇行していた荒川の流路はまっすぐに変更されることになり、大正9年（1920）大規模な掘削工事が始まりました。そして同15年（1926）通水しましたが、これが現在目にすることができる荒川です。祐美は、亡くなったのち人々から「治水翁」と称され、昭和48年（1973）に大宮市名誉市民に推挙されました。所沢新道沿いには斎藤治水翁彰功碑（地図①）が建てられており、その功績を偲ぶことができます。

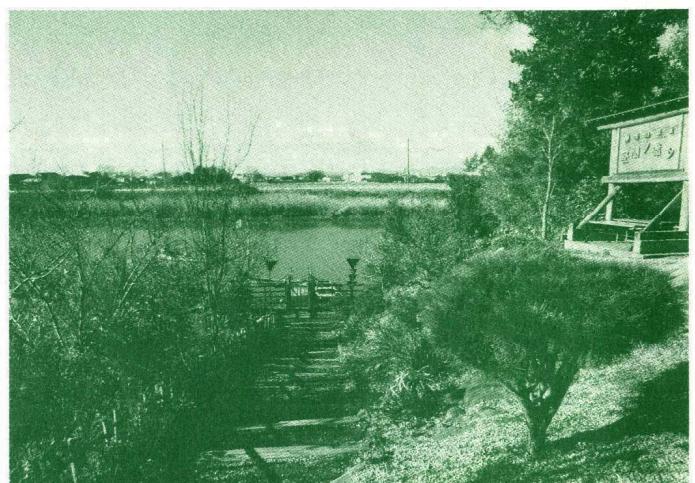
びん沼川

荒川の西側で川越市や富士見市の市境を流れるびん沼川が、もとの荒川の本流です。荒川の改修工事により、

これまで本流であった一部分が出口のない瓶のような沼となって残り、「瓶沼」と呼ばれました。その後、新河岸川からの水を南畠排水機場から荒川へ流すようになり、再び川として働き始め、「びん沼川」が生まれました。いまでは釣り人の絶えない憩いの場になっています。

昼間の渡し 地図②

船渡橋からびん沼川に沿って北上すると「昼間の渡し」があります。ここには徳川家康にまつわる次のような伝説が残されています。



——関東入府直後の天正19年(1591)、川越から岩槻に向かう道中、徳川家康は北条氏の残党に追われた。真夜中にこの渡し場にたどり着いたとき、村人は盛んに松明を焚いて家康を迎えた。それが昼間のように明るかつたので家康は大いに喜び、渡し守に昼間の姓と川岸に面した土地を褒美として与えたという。

明治末期に県道ができると現在の船渡橋付近に橋が架けられると、渡しは廃止され、跡は近年に至るまで放置されていました。

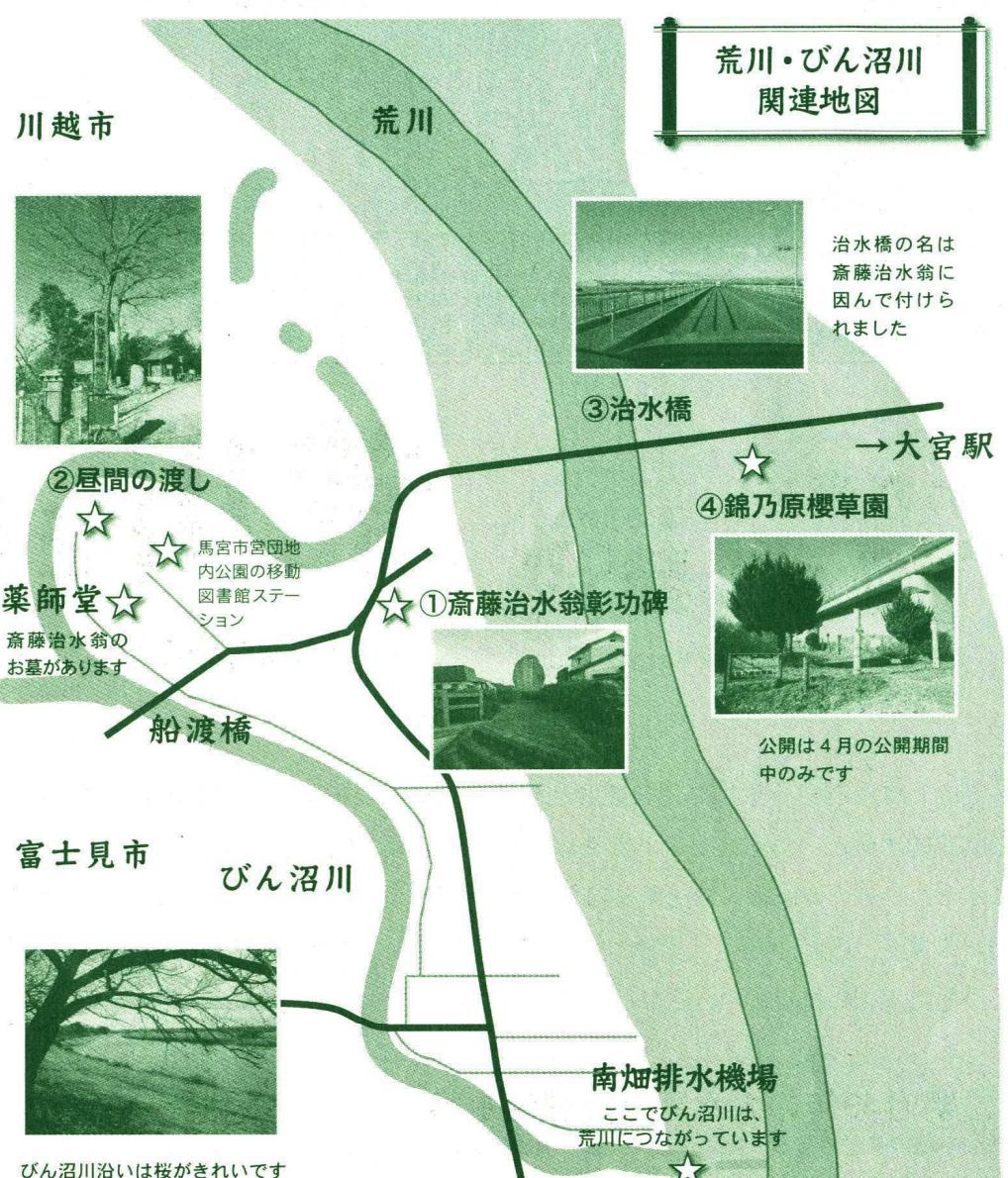
この渡しの復元に尽力し、船着場にある記念堂(「権現さま」)を建てたのが、有志より結成された「昼間ノ渡シ友の会」です。約50名の会員が渡し場跡の整備や維持管理を行っており、例年11月3日の文化の日には、伝説を模した「火まつり」が行われ、地域の歴史文化遺産を後世に伝えるためイベントも催しています。



大正後期の荒川改修工事で分断された東西の地域をつなぐのが治水橋です。昭和9年(1934)に2年半の工期と作業員5万人を要して架けられ、鉄橋部分の長さは628m、横堤を含めると1500mとなりました。今の新治水橋は平成5年に新設されたもので、橋上から眺める風景は雄大なものです。



荒川河川敷はサクラソウの名所でした。昭和8年(1933)、ここを訪れたジャーナリスト徳富蘇峰は咲き誇る花々を見て感動、さらながら錦を織りなしたような景色から、「錦乃原」と命名しました。この自生地は「馬宮村桜草自生地」として国の天然記念物に指定されました。その後、太平洋戦争による食糧増産の必要から開墾され、天然記念物の指定も取り消されてしまいます。その後、残ったサクラソウを保存・育成するため、地元の方々の熱意により「錦乃原桜草保存会」が結成されま



した。現在では、「錦乃原桜草フェスティバル」を毎年4月中旬に開催し、「錦乃原桜草園」(荒川左岸・治水橋下)を公開しています(今年は4月19日(日)~21日(火)に公開、馬宮公民館でも4月17日(金)~19日(日)に展示会が開かれます)。

今回ご紹介したさいたま市西部には、移動図書館のステーションもあります。

荒川の歴史を感じながら、散策してみてください。

参考文献

- ・『馬宮のあゆみ 荒川の流れとともに』「馬宮のあゆみ」刊行委員会編 1992
- ・『馬宮村のあゆみ 馬宮村の昔と今—改題』都筑今朝蔵編著 1958
- ・『埼玉ふるさと散歩 さいたま市』秋葉一男編 さきたま出版会 2003
- ・『斎藤祐美 荒川の治水翁』斎藤祐美研究会編 埼玉新聞社 2007
- ・『大宮をあるく 1 Guide book 東部編』1988
『同 2 Guide book 西部編』1989
『同 3 Guide book 川と街道』1990
『同 6 Guide book 氷川・荒川・天の川』1993
- 以上、大宮市教育委員会編集・発行
- ・『訓読日本三代実録』武田祐吉訓読 臨川書店 1986

本棚 ぶらり

武士の出世事情

比較的平和だったとされる江戸時代。そんな時代の武士にとって、幕府の役職や人事は一大関心事でした。

『お殿様たちの出世 江戸幕府老中への道』(山本博文著 新潮社 2007)は老中という役職を中心に、江戸城内の政治体制の変化を追っています。初期には将軍の側近だった老中ですが、中期には政治の実務の中心となります。ところが幕末には、部下が思わず「馬鹿」と言ってしまうほど力のない存在になってしまいます。

大名より格下の旗本や御家人(※)にとっては、役職につけるかどうかは死活問題でした。

次に紹介する『武家に嫁いだ女性の手紙 一貧乏旗本の江戸暮らし』(妻鹿淳子著 吉川弘文館 2011)は万喜という女性の手紙をまとめたもの。二回目の結婚で旗本の妻となった万喜には最初の夫との間に精五郎という息子がいました。精五郎は御家人の養子となりましたが、成人しても役職に就くことができません。役職に就く上で有利と考え鉄砲などの稽古事に励みますが、道具類などの費用がかさみ借金は増える一方。これでは生活が立ち行かない、内職に専念しようと決心した矢先、役職につくことができました。万喜は大変喜び、さらにいい役



『武家に嫁いだ女性の手紙』

一貧乏旗本の江戸暮らし
(妻鹿敦子著 吉川弘文館)

職につくことを期待しています。

3冊目に取り上げる『代官の日常生活 江戸の中間管理職』(西沢敦男著 講談社 2004)では、御家人から旗本へと格上げされた小野左太夫一吉という人物が紹介されています。一吉は、薄給の大奥進物取次上番、御徒自付と昇進し、さらに上の勘定方へと進みます。この時、御家人から旗本へと格上げされました。さらに一吉は、幕府直轄地で徵税や警察機能などを担う代官となり「利発之代官」と賞され、のちに大身の旗本が務める勘定奉行にまで出世しています。

一吉のような目覚ましい出世の例は江戸時代中・後期に十例以上あり、万喜が知っていたとしてもおかしくありません。いずれは出世して落ち着いた暮らしを・・・と子に望むのは親の常のようですね。

(※) 旗本や御家人 徳川家直属の家臣のうち、將軍に拝謁できるのが「旗本」、できないのが「御家人」です。就ける役職も違い、旗本の就く役職の方が御家人の就く役職より役料(役職に伴う給料)も多かったのです。

大人も楽しめる 絵本の世界 第9回



『かわ』 鈴木のりたけ作 幻冬舎 2010

『かわ』というタイトルを見て、皆さんはどうなイメージを頭に浮かべたでしょうか? 漢字でも「川」と「河」という二文字があります。澄んだ水の清々しい渓流が頭に浮かんだ人もいれば、ゆったりと流れる大河の姿に想いを馳せた人もいるでしょう。用水路のような細い川や、故郷の懐かしい川の風景を思い出した人もいるかもしれません。

この本は、山に雨が降り小さな流れとなり、それが川の源流に流れ込むところから始まります。水は、渓流→上流→中流と流れていき、里川や湖や沼へ、用水路から田んぼへ、そして下流から海へと、壮大な旅を続けていきます。水の循環の中で、豊かな自然が育まれていることを描くのがこの本のコンセプトです。そのため、川の中の様子を詳しく、鮮やかな色合いで、隅々まで書き込んでいます。生き生きと動きまわる魚がたくさん登場するので、見ていて退屈することはありません。

同じ作者の作品で、これまで5冊が発売されている「しごとば」(ブロンズ新社)というシリーズがあります。適度なデフォルメを加えつつ、ユニークな視点から圧倒的な情報量を盛り込む、とにかくインパクトのある画面構成にするのがこの人の魅力です。

第15回現代短歌新人賞 受賞作が決まりました



さいたま市が主催し、市民の文学活動の充実と日本現代短歌界の振興を目的に、歌壇に新風をもたらす歌人を表彰してきた「現代短歌新人賞」。その第15回受賞作が、^{とみた むつこ}富田睦子さんの第一歌集『さやの響き』(本阿弥書店 2013)に決まりました。

「私にとって短歌は、日常の中に不意に入り込む空白や飛び出てくる部分を言葉にしたもので。今後はもっと広い世界に目を向けつつも私という基礎から足を離さぬように歌っていきたいです。」(富田さんの受賞の言葉)

「現代に生きる女性が妊娠し、出産し、育児していく過程を、手ざわりで把えるように、なまなましく、新鮮にうたいあげた点に、この歌集の特色があり、作者の将来を窺わせるに足る才能を感じさせる歌集であった。」(選考委員講評)

受賞作品や選考過程については、雑誌「ミセス」(文化出版局)2015年3月号に記事が掲載されています。図書館でも所蔵していますのでご覧ください。

表彰式はこの3月8日に行われ、あわせて選考委

員による「大西民子を語る」と題した記念座談会が開催されました。

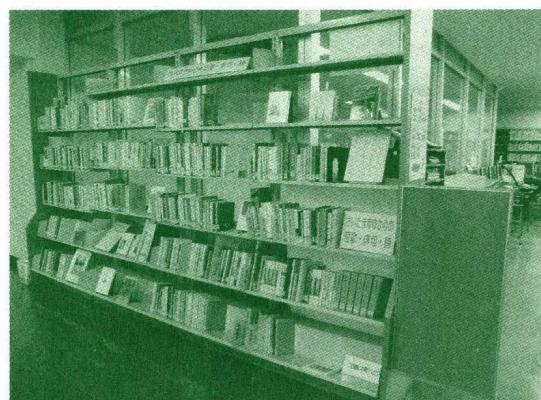
記念座談会で取り上げられた大西民子(1924-1994)は、現代短歌新人賞設立のきっかけとなったさいたま市ゆかりの歌人です。昭和24年(1949)に盛岡市から大宮市(現さいたま市)に移住してきた大西さんは、埼玉県の職員として県立文化会館や県立図書館等で勤務する傍ら作品を発表、歌集「まほろしの椅子」をはじめとする多くの作品を残しました。また、現代歌人協会理事や、「埼玉新聞」の歌壇や「大宮文芸」の選者等を歴任し、短歌の普及にも尽力しました。平成4年(1992)には紫綬褒章を受章しています。

その大西さんにちなんで、大宮図書館では2階の公開図書室に「大西民子 資料展示コーナー」を設けています。自筆の色紙などゆかりの品を展示し、関連書籍の紹介を行っています。これを機会に、郷土の歌人である大西民子の作品にぜひ触れてみてください。



→
歌集は、ゆかりの作家の作品を集めたコーナーでご覧いただけます
←

大宮図書館
大西民子
コーナー



編集：さいたま来ぶらり通信編集委員会 発行：さいたま市図書館

<http://www.lib.city.saitama.jp/> 携帯電話用 <http://www.lib.city.saitama.jp/m/> (下のQRコードを読み込んでください)

北浦和図書館 832-2321	三橋分館 625-4319	与野南図書館 855-3735	大久保東分館 853-7100
東浦和図書館 875-9977	春野図書館 687-8301	西分館 854-8636	北図書館 669-6111
大宮図書館 643-3701	大宮東図書館 688-1434	岩槻図書館 757-2523	宮原図書館 662-5401
桜木図書館 649-5871	七里図書館 682-3248	岩槻駅東口図書館 758-3200	武藏浦和図書館 844-7210
大宮西部図書館 664-4946	片柳図書館 682-1222	岩槻東部図書館 756-6665	南浦和図書館 862-8568
馬宮図書館 625-8831	与野図書館 853-7816	桜図書館 858-9090	

事務局：中央図書館 浦和区東高砂町11-1 TEL 048-871-2100

★★編集後記★★ 今回は、荒川とびん沼に連なる歴史を特集しました。びん沼は釣りスポットとして有名ですが、桜スポットでもあるのです。春の日差しを浴びながら、ゆったりとした散策を楽しんでみてはいかがでしょう。

次回発行予定：8月15日(年3回発行)

